説教20200809フィリピ3：1-11 21-479 195 Ⅱ49

「では、喜びなさい」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　悲喜こもごもという言葉がありますが、私たちは悲しみの時と、喜びの時とを代わるがわる味わいながら、この世の歩みを進めています。それと同時に時代の全体的な雰囲気というのもあって、例えば終戦後７５年目を迎えました今この時は、悲しみの時でしょうか喜びの時でしょうか。お盆に帰省もままならないような状況に置かれている私たちは、実に悲しみの時を迎えていると感ぜられますが、何か私たちはその感情を素直におもてに現せないでいる、涙を流せないでいるのではないでしょうか。

　ルカ福音書は言います。「今泣いている人々は、幸いである、あなた方は笑うようになる。」「今笑っている人々は不幸である、あなたがたは悲しみ泣くようになる。」ここには悲しみと喜びとが隣り合わせの場所にあって、両者は入れ替わりつつ行き巡っていくのであることを想わされます。もちろん神の御心に適った悲しみと世の悲しみには違いがありますし、「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。」と詩編で歌われていることも思い起こさなければなりません。

　つまるところ、これらの聖句に聞いて全体的に考えてみますと、私たちは平生、主にある悲しみのうちに涙を流しながら暮らし、時に主によって笑わされるのが幸せなのかも知れません。

さて今から７５年前の終戦の日を境にして、私たちの悲しみと喜びのかたちはガラッと変えられました。今、戦争の喜びなどという言い方をすれば、たちどころにバッシングを浴びてしまいますが、戦前戦中は、多くの人々が「万歳、万歳」と唱え戦勝を喜び祝いつつ戦いは継続されました。一方で、戦いにまつわる悲しみの方は封印をされてしまいました。

しかし小川未明という童謡作家が雑誌「小学六年生」に1940年1月に発表した「とびよ鳴け」という童謡には、戦時中には珍しく、戦いにまつわる悲しみが素直に描写されています。少し引用いたします。

「もう、お正月がくるのに、出征する兵隊さんがあるんだな。」　辰一は、感慨深く思いました。このとき、突然軍歌の声が、停車場の方にあたってきかれたのでした。国防婦人の制服を着た人たちが、小さな日の丸の旗を振って、調子を合あわせて歌っていました。　紅いたすきをかけた、出征兵は、正しく、つつましく、立たって、みんなの厚意に感謝していました。それは、徳蔵さんが、送られたときの姿を思い出ださせます。まったく同じでありました。徳蔵さんはこうして送られていったが、それぎり帰ってこなかったのです。そう考かんがえると、熱い涙が、目の中なかからわいてきました。いつのまにか、この人と徳蔵さんとが、同じ人になってしまって、限りない悲壮な感じが抱かれたのであります。

辰一という青年が、ある出征兵の姿に戦死した徳蔵おじさんの面影を垣間見るという内容ですが、戦時中にこの文章を検閲した検閲官も、この率直に示された戦いの悲しみに、頭を垂れざるを得なかったのでしょう。それでこのような悲しみの表現が、子供たちに向けて発表されたのかも知れません。

さて、今私たちが読んでいますパウロのフィリピの信徒たちへの手紙も、そのテーマは喜びでありますが、その基調は悲しみと涙に染められています。先週の聖書箇所でも２７節に「わたしをも憐れんで、悲しみを重ねずに済むようにしてくださいました」ですとか、次週の１８節には「今また涙ながらに言いますが」などと言ってパウロは、終始、悲しみと涙に明け暮れてこの手紙をしたためていたようです。パウロは悲しみつつ、再び「主において喜びなさい」と言ってフィリピの人たちを励まします。同じことを何度も言い続けることは大切です。今日私たちはユダヤ人の割礼という事柄、それは私たちの日常に決して縁があることではありませんが、その割礼ということの背景を通して、当時の人々と同じ喜びに満たされることが出来るのです。

　パウロは、２節から、あの犬どもに注意しなさい、と言って、あるユダヤ人たちを激しく非難しておりますが、その背後には、ユダヤ人の同胞と同じ喜びを分かち合えないでいるパウロの悲しみがあります。ローマの信徒への手紙9：2～3節でパウロは次のように述べています。「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。

わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。」

　パウロは、あの犬どもと、彼らを激しく非難しながらも、また彼らがキリストによって救われることを心から願っているのです。あの犬どもというのは、キリストの教会に割礼の習慣を持ち込もうとしている人々のことです。その様子は使徒言行録15章に具体的に記されています。１５章1節から、新約聖書242ページになります。15章 01節

「ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、そのほか数名の者がエルサレムへ上ることに決まった。」つまり、当時、キリストの教会に新たに加わったユダヤ人の中で、従来からの割礼という自分たちの慣習を、教会内に持ち込もうという人達がいたということです。

　慣習というのは一度その中に取り込まれると、私たちはそれに固執し、それに救いを求めるようになります。私たちに身近な例で考えてみますと、冒頭に申し上げました、戦いに勝つことで喜びを継続するという慣習は、７５年前に敗戦という出来事の前に廃れたと思われるかもしれません。しかし、その後も勝つことの喜びは、勝ち組負け組という言葉に表されるように、今も尚、私たちの行いの基調となっているのではないでしょうか。

パウロは、教会の中に、割礼があるかないかという救いの基準を持ちこもうとしている者がいることに非常な危機感を持っています。ですからそれらの者を、犬どもと呼んで、教会から厳しく排除しようとしているのです。先ほどの使徒言行録からの引用によりますと、パウロやバルナバとその人たちの間で激しい意見の対立と論争が生じたとあります。そしてこの論争をきっかけにしてパウロは盟友であったバルナバとも対立をせざる負えなくなり、こののち、パウロとバルナバとは伝道旅行を共にすることはなくなってしまったのでした。実は回心したパウロを教会に紹介したのもバルナバであり、パウロにとってバルナバとの別れも、じつに悲しいものがあったに違いありません。しかし生粋のユダヤ人のある人々とっては、たとえキリストの教会に連なったとしても、肉に割礼があるかないかという違いは、各々の救いに関わる重大なしるしであり続けたのでした。

　ユダヤ人のうちには、割礼を受けるという儀式を経て、ユダヤ人社会の一員として数えられ、そうして神の民となって救われるという長い慣習の年月の記憶が血となり肉となっておりました。ですから、そういったユダヤ人にとっては、キリストの救いより、割礼の有無による救いの方がまさってしまったといわざるを得ないでしょう。確かに、割礼があるかないかというのはビジュアル化されていますし、分かりやすいので、多くのユダヤ人たちは救いの要件として結局そっちの方を選んだのかも知れません。ここでちょっとご説明しておかなけれななりませんが、割礼を受けるという儀式を受けられるのは、血のつながった生粋のユダヤ人に限定されるわけではありません。確かにベニヤミン族に属したパウロなどは、生まれて８日後という、生後すぐの割礼を施されることになりますが、異邦人であってもその信仰や生活態度がユダヤ人としてふさわしいと見なされれば、その人は割礼を受ける儀式を経て、ユダヤ人社会に受け入れられたのでした。

　ここで私たちは、割礼を受けるという儀式と、キリストの洗礼を受けるという儀式の、ある類似性を思わないわけにはいきません。両者とも血のつながりだけによるのではなく、すべての人に開かれています。そして両者とも、救いの道へとつながる儀式だということです。

　パウロは自らが割礼を受けた者であることを明言し、「とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない」と言って自分の立場を明らかにしたうえで、それでも、私は断然、キリストに頼りますと明言をしているのです。パウロは二者択一を迫っています。決して割礼を求めるユダヤ人に対して、「キリストこそ救いの道だが、君が割礼のあるなしも大切に思うんだったらそれも仕方ない」などと言って妥協はしないのです。

　妥協しないパウロには、キリストの教会に入れられる者が、まことに一つの変わることのない喜びに満たされるようにという思いがありました。それじゃないとパウロは人々に向かって何回も「喜びなさい、喜びなさい」と連呼することは出来なかったでありましょう。平たく言えば、パウロはそういうユダヤ人と安易に妥協して、その時で終わってしまいそうな、安易な喜びの道を選ばなかったということです。ですから「喜びなさい、喜びなさい」と連呼するパウロは、まさに涙と共に種を蒔きつつ、悲しみを重ねていたといっていいでしょう。

ではなぜパウロはそのような悲しみの日々に耐えることが出来たのでしょうか。その訳は７節からに記されています。「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見做すようになったのです。そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。」

キリストを**知ること**の**あまりのすばらしさ**、このことが他のことよりはるかに勝っていることをパウロは知りました。今日の聖書箇所で、私たちは、キリストを選ぶか、割礼を選ぶかと問われていますが、それはもちろん絶対にキリストの方を選びますと皆さん即座に答えられるでしょうが、比較するものが割礼ではなく、**この世の幸せ**ということになりますれば、私たちはたちどころに迷いと苦しみの心境におちいらざるを得ないのではないでしょうか。

キリストを知ること、そしてより深く知っていくことは、この世で成就した幸いに勝っています。この世で成就した幸い、喜びには限りがありますが、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義には限りがありません。私たちは、神の義に生かされる時、もちろん十字架の苦しみを味わい、悲しみを重ねることでしょう。涙と共に種を蒔くことになるでしょう。しかしキリストはそのような私たちをそのまま放ってはおかれません。神の御心に適った悲しみはやがて、キリストとその復活の力によって、一つの同じ変わることのない喜びへと変えられるのです。

　私たちはなお、隣人たちのために涙を流さねばなりません。しかし、かの日の新しいエルサレムでは、私たちの目の涙はことごとく神によってぬぐい取られ、もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もなくなっているのです。

お祈りいたします

天の私たちの父なる神よ、今日御前に私たちを集めて下さり、共にあなたを礼拝賛美出来ます幸いに感謝いたします。

私たちは悲しみのうちにこの世を歩んでおりますが、あなたのまことの愛のうちに喜びを得て生かされておりますことに心より感謝いたします。あなたの恵みが憐れみを求める私たちに与えられていますことを感謝いたします。

どうか、私たちがこの世にあふれる多くのしるしに惑わされることなくあなたの指し示す十字架に向かって礼拝し賛美して行くことが出来ますよう私たちの心を整え導いてください。悲しみを重ねております私たちが、キリストをより深く知る事によって救いの道を迷わずに歩んでいくことが出来るようにして下さい。この世での労苦や悲しみが、十字架の死と復活によってこそ、喜びへとかえられることを、私たちに悟らせてくださいますように。

今、病の床に在られる兄弟姉妹を覚えます。どうかお一人お一人が、主の深い憐れみのうちに、慰められ癒されますように。あなたが御そばに居たまいて生き生きとした希望をお与えください。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます、私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。